対象作品／ウィリアム・J・ベネット著『魔法の糸』実務教育出版

# 自ら気付く幸せ

弘前市立第三中学校　小堀和華

「どれか好きな本を一冊あげます。」

小学校卒業の時、担任の先生が自分の本を沢山教室の机に並べ、クラスみんなにくれました。じゃんけんで勝った人から選べる事になり、自分が一番最初にもらう事ができました。どれも見た事がない本ばかりで選ぶのに迷いましたが、この本だけは、まるで自分の事を呼んでいるかのように感じ、手に取りました。先生はいつも私達に厳しく、つらかった思い出しかありません。でも、先生も読みきっていないという分厚い本を選んだ私に、快く差し出してくれました。

「それ読んでくれるの？」

と、少しうれしそうにも感じました。

まるで辞書のような厚さの本、本を読むのが苦手な私ですが、とても心ひかれました。まほうの糸、本の表紙がカラフルなので、虹色のような糸が出てくる楽しいお話が書かれているのかなと想像しました。題名の横に「こころが豊かになる」と書いてあります。生きていくのに何かヒントになるかもしれないと思いました。

読み始めると、それは主にアメリカの昔から伝わる短い物語を集めた本でした。各々読んでいて直接的な文というよりも、読んだ受け手が考える、考えさせられるというようなものです。

私が今取り組んでいる様々な事も、「やりたくないな、これ意味あるのかな」といやに思う事もあります。主人公のように時間を早く過ぎさせられるまほうの糸があったら、と思う事もあります。共感できるので、どんどん読み進める事ができました。

今の生活に不満を感じている主人公。理想が叶っても、結果また新しい不満がうまれて、失って初めて元々の幸せを感じ、今まで通りが良かったと思っていました。

この本は、私達が中々経験できないから常にずっと望む理想を、物語を通して教えてくれました。例えいやな事があっても、良い事も悪い事も全部思い出になり、つらい事をがん

ばって乗りこえたからこそ楽しい事もあると思わされました。いやな事からにげるのではなく、まずがんばってみようと決めました。

お金が大好きな自分と重ね合わせやすい主人公が出てきました。その主人公は黄金が大好きで、大事なむすめを放っておいてまで黄金、黄金、誰よりも持っていても、より多くの黄金を求めていました。黄金が一番大事だと思って、他の物を全部失って、本当に黄金だけになったら、その主人公は失望しか残りませんでした。私の親も、お金は大事だけどかせぐ過程が大事だと言っていました。少しつながるものがあるのかなと考えました。

この本の中の物語は、教え方として間違った考えを抱いている人に、直接頭ごなしにおこったり否定するのではなく、一度相手の望みを聞き入れてから自分に気付かせるというものでした。

不思議な事に、一度目に読んだ時と二度目に読んだ時は印象が違う所がありました。一度目読んで母に説明した時は、本当に書かれている先も伝えていて、自分の頭の中ではもっと文章があったはずなのに、二度目読み直すと、その文はありませんでした。それは読んでから母に伝えるまでに、自分なりに解しゃくして、作りあげていた文章なのかと思いました。

読み進めるに従って、この本をくれた先生の事を思い出しました。きっと先生も、私達への教育の仕方を手探りで、どうより良いものにしていくかを考えてこの本を手に取ったのではないかと思います。厳しくおこっていたのも私達への愛だったのだと感じました。素直な良い行いというものを教えてくれていたのだと思います。

今の生活、人生の素晴らしさ、沢山の事を考えさせてくれた本でした。きっと私が成長して、時が経ってから読むとまた違う印象や気付きがあると思うので、この本をずっと大事にしていきたいと思います。